

クルグズ共和国における農牧業の地域的特性

梶 浦 岳*

キーワード：農牧業、家畜密度、地域的特性、クルグズ共和国

I. はじめに

FAO (2001) の報告において、東西冷戦の終結後、市場経済の自由化にともない、ポストソ連時代の中央アジアにおける Pastoralism (牧畜) が社会システムの急激な変化にどのように対応しているのか、状況把握の重要性を説いている。また、グローバル経済と地域経済の結びつきにより、牧畜にともなう現金獲得の手段の複雑性や、巨額の資金が動く家畜売買などのシステムの変化が起きている。そして、これらの様々な変化に対し地理的空間や時間軸に注意が必要だと指摘している。中央アジアの牧畜について、ソ連体制からの移行期についての論考はいくつか散見でき、例えば、Kerven によるカザフスタンとトルクメニスタンの農牧業を扱った論考集では、生態系の変化から社会システムの変化まで、ソ連崩壊により生態系の回復、不安定な組織化などのメリットとデメリットが混在していると特徴付けている (Kerven 2004, Alimaev 2004, Sarah and Milner-Gulland 2004)。そして、論考集では、コルホーズ・ソフホーズ体制の崩壊が変化の主要な原因としている。他には、及川 (2004) によるカザフスタンの家畜飼育の歴史から、冬の越冬技術について、定住以前からの伝統的な技術をソ連時代の近代的な技術の複合によって現在に受け継がれていることを明らかにした論文がある。以上のような論考では、時間軸に重きを置いてはいるものの、地理的な空間把握としては不十分である。そこで、従来の地理学研究分野をみると、池谷 (2006) は現代の牧畜を商業的、生業的と分類し、さらにそれらが関連している自然特性、地域経済、文化特性の総合的な把握が必要だとしている。次に、牧畜の形態分類に関して、月原 (2000) は、牧畜のみでなく農牧業の分類こそが必要であり、既に牧畜が単独で行われている生活形態は成立しない時代であると指摘している。このように牧畜を取り

巻く状況はより複雑になり、同じ国内の同民族でも牧畜形態を一括りにすることはほぼ不可能といえる。

このような背景を踏まえて、本稿では中央アジアの中でも山岳地域に位置するクルグズ共和国¹⁾ (以下クルグズスタンと表記) を研究対象とする。この国は、中国、カザフスタン、ウズベキスタン、タジキスタンに挟まれた小国であり、この国の約60%を占める基幹民族であるクルグズ人はソ連体制以前より純粋な遊牧形態ではなく、垂直の移動と農耕を混合させた生活形態をとっていた (澤田 1999)。そして、クルグズstanは1920年代にソ連に組み込まれて以降、農業と牧畜を中心に据えたコルホーズ、ソフホーズの生産体制となった。この生産体制により、ソ連時代を通じて山岳地域を利用した家畜の飼育や、灌漑用水路を整備した農業と牧畜を近代化していき、固定した職業としての農夫や牧夫を作り出し、ソ連式の農牧業体制を形成した。クルグズstanはソ連の中でも特に羊毛生産の重要地域とされていたが、1991年のソ連崩壊によってこの生産体制は激変した。

ところで、従来のソ連崩壊後のクルグズstanの牧畜研究においては、家畜頭数、家畜飼育の体制の変化を論考した Wilson (1997) によるものがある。彼は、1996年までの市場経済化の指標として家畜の生産量や消費量の統計データを用いて、これからの未組織の放牧体制が内包する問題点を指摘している。しかし、ここでは地域的な特徴を単に標高差でしか捉えておらず、さらに、民族構成や農業などの特徴にはあまり触れられていない。また、農業部門については Peter (2001) による農業開発の観点から、村の施設の老朽化といった一般的な問題点は指摘されるものの、地域としての農業、牧畜の特徴にはあまり言及されていない。さらに、開発分野の JICA 報告書によると、クルグズstanの農業、牧畜業、林業、養蜂業など複数の業種の現状報告がなされている (国際協力機構農林水産開発調査部2003)。その報告書の

* 立正大学大学院地球環境科学研究科研究生

中でも、州ごとに異なる文化的背景があり、開発援助には現地での特徴が重要だとしている。また、吉田(2004)では社会人類学のアプローチから、クルグズスタン北部のナルン州の農村部での事例調査をもとに、親族ネットワークの中央アジアのカザフスタンやウズベキスタンとの比較を試みているが、同国内の州レベルでの比較はあまりなされていない。

そこで、本稿では、クルグズスタンの複雑化した農牧業は自然、社会の様々な地域的条件の中で農業と牧畜が均一に行われているわけではなく、複数の要因を背景に地域が成立しており、どのような地域的特性の上に成立しているのか、これを明らかにすることを研究目的とする。そして、研究方法は、本稿の基盤資料として1997年以降のクルグズスタンの国立統計委員会発行による各種統計を用いて、自然環境と民族構成、農業、牧畜の4項目に分け、各州の地域的特性と、その差異を考察する。さらに、2002～2007年の毎夏に実施した現地調査で得た写真を参考として付随する。

II. 地域概要

クルグズスタンは北部4州、南部3州の計7州に区分される(図1)。州の下位区分には地区が置かれ、さらにその下の行政組織として村々を束ねて管轄する村政府²⁾がある。村政府の下には1～10の村が所属しており、これら所属する村のひとつに、農地や放牧地などの税金、各種の行政書類等を扱う村政府の役所が設置されている。国土面積は日本の3分の2、人口は約536万人(2008

年)³⁾、7州のうち、人口規模の上位はチュイ州⁴⁾とオシュ州である(表1)。チュイ州にはソ連時代から中心地とされた首都のビシケク市⁵⁾とソ連時代以前の中心地であったオシュ市がある。村の数は、北部に比べ南部のほうが細分化され、特にオシュ州は村数の多い点が特徴的である。一方で、州の人口、面積ともに最小なのはタラス州である。次に、村の標高範囲において、最低地にある村はバトケン州の410mであり、最高地の村はオシュ州の3,112mである。州内の最低標高としては最も高いのはナルン州の2,040m、次いでウスックグル州の1,600mとなっている。標高差については、最小はナルン州であり、最大はオシュ州である。

次に、産業別の労働人口の特徴をみると、いずれの州も第1次産業が多くを占めており、第2次産業は、チュイ州、ジャララアバド州、オシュ州で割合が高く、タラス州、ナルン州で低い(図2)。全体的に工業に占める割合が低い、第3次産業の割合は大都市を抱えるチュイ州とオシュ州で比較的高い。

III. 自然環境と民族構成の地域的特性

1. 自然環境

山岳地域に位置するクルグズスタンの各地の気温と降水量を、資料の制約から、ジャララアバド州を除いた6つの場所の気温と降水量を示した(図3)。まず、北部から概観していく。首都のビシケク市は3～5月が雨季、7～9月が乾季である。最寒月でもマイナス5度以下にはならない。カラコル市は5～8月まで雨季、12～2月

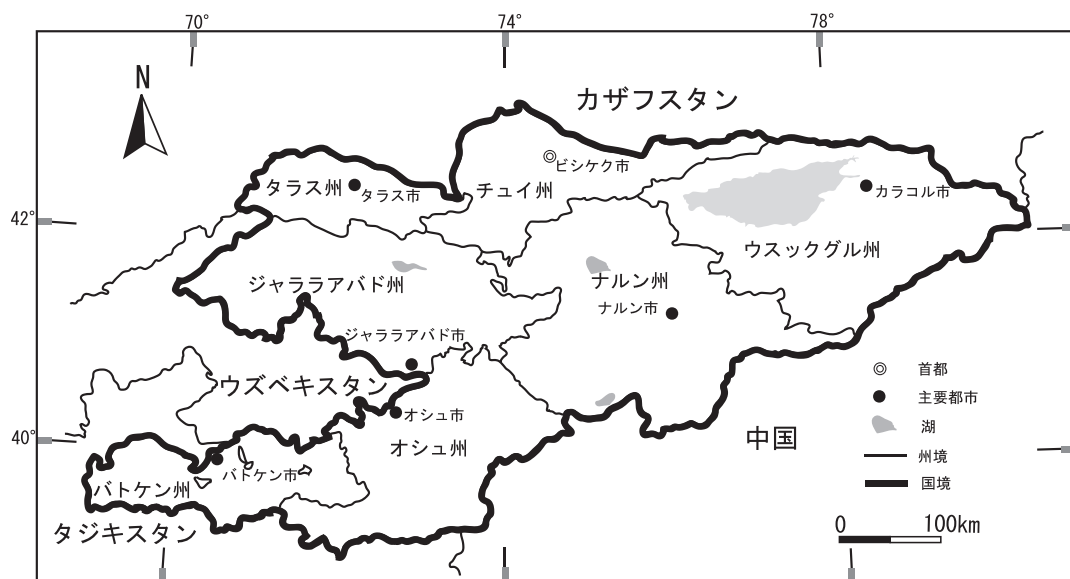


図1 主要都市と行政区分

表1 州別の地域概要

分類	国・州名	主要都名	人口 (人)	面積 (千km ²)	地区	村政府	村	村の標高範囲 (m)
国	クルグズ共和国	—	4,850,734	199.9	39	430	1802	—
北部4州	チュイ	ピンケク市	1,559,926	20.3	7	105	327	700—2040
	タラス	タラス市	200,269	11.4	4	35	90	540—2290
	ウスツクグル	カラコル市	415,513	43.1	5	58	181	1600—2050
	ナルン	ナルン市	248,699	45.2	5	56	132	2040—2840
南部3州	オシュ	オシュ	1,176,646	29.2	7	79	467	980—3112
	バトケン	バトケン市	380,142	17	3	29	189	410—2040
	ジャララアバド	ジャララアバド市	869,539	33.7	8	68	415	1000—2500

データは1999年。

出典：National statistical committee of the Kyrgyz Republic (2000), Schuler, M., Dessementet, P., Torgashova, L., Abubakirova, T., Minbaev, M. (2004)

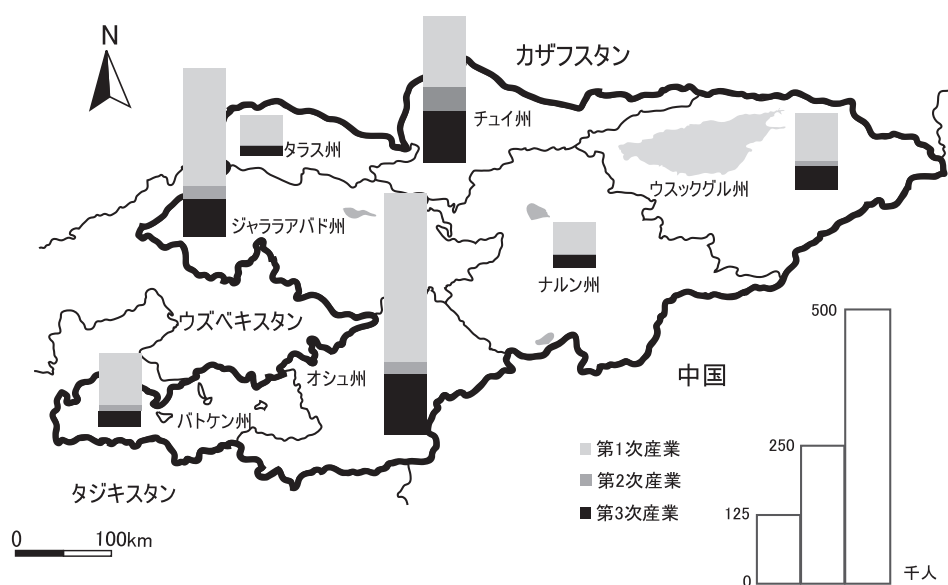


図2 州の産業別労働人口

労働人口は15歳以上。データは1999年。

出典：National statistical committee of the Kyrgyz Republic (2000)

が乾季である。標高は約1,700mの高地にあるので、夏の平均気温は20度に満たない。しかし、冬季はマイナス10度を下回らず、標高に比べて比較的温暖だといえる。ナルン市は5～7月が雨季で、11～1月が乾季である。標高は2,000mを超えているため、最寒月の1月の平均気温はマイナス15度を下回る。タラス市の降水量は3～5月が雨季、乾季は7～9月が中心である。南部のオシュ市は冬から春にかけての2～4月に降水量が多く、夏の7～9月は降水量が10mmを下回る。平均気温は7・8月で25度を超える。イスファナ市も気温はオシュと酷似しているが、降水量はオシュ市の約半分である。

以上のような特徴から、低地は冬から春になるにつれて降水量が上昇するが、高地となるにつれて夏が雨季となる。このような高山気候特有の降水量の逆転現象によ

り、夏の放牧に適したのはカラコル市とナルン市の標高より高地であろう(写真1・2)。さらに、北部は南部に比べ、山岳地域が多いことから、夏に多雨冷涼の傾向があり、家畜の放牧には適しているといえる。また、ピンケク市は標高が756mと低く、北部の他市と比べると、気温、降水量ともにカラコル市、ナルン市、タラス市よりも高い。また、南部ではオシュ市より標高の高いイスファナ市であるが、降水量はオシュ市の半分に満たない。

2. 民族構成

州ごとの人口をクルグズ人、ロシア人、ウズベク人、カザフ人、タジク人、その他の民族の6種に分けて、1989年と1999年の州の民族構成の特性をみる。1989年には、チュイ州以外でクルグズ人が過半数以上を占める

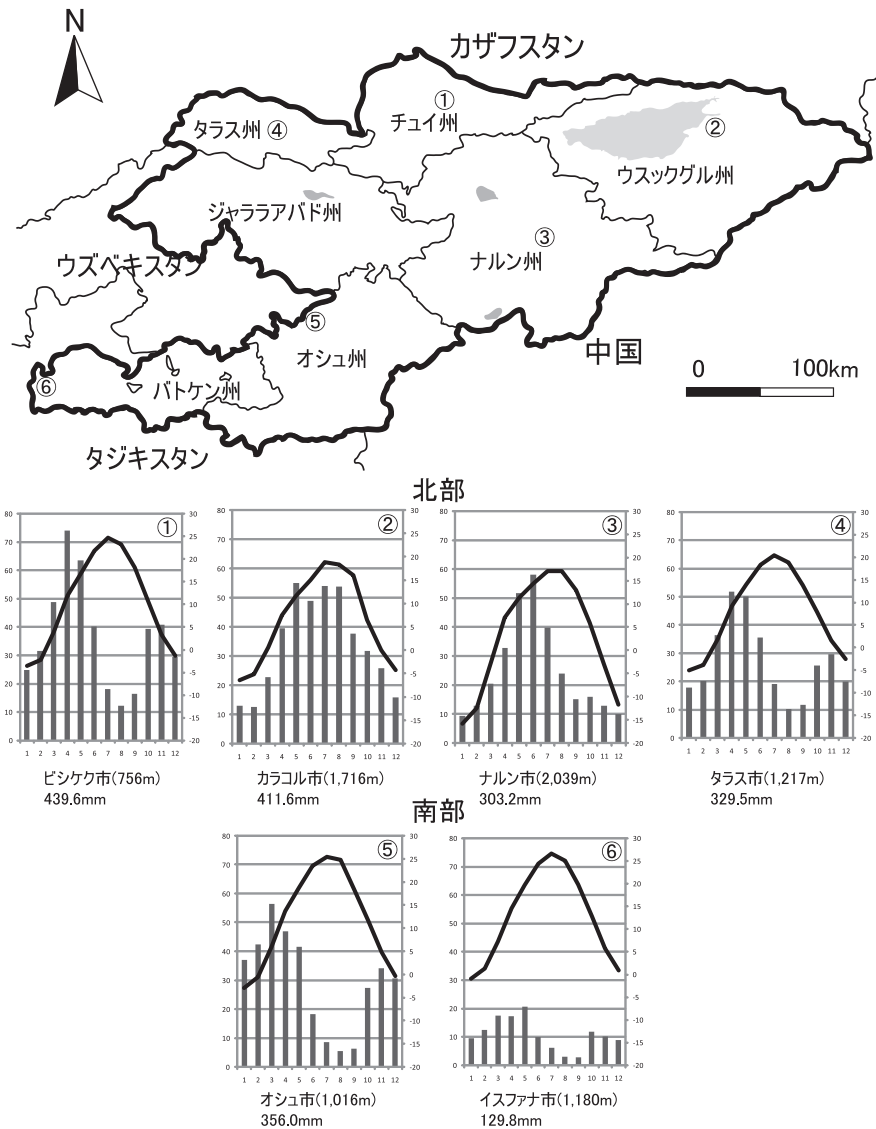


図3 クルグズスタン各地の気温と降水量

バトケン州の州都のデータがないため、イスファナ市を選択した。各地のデータは、カラコル市・オシュ市で1947～1997年、ビシケク市・タラス市・ナルン市で1950～2000年、イスファナ市で1940～1990年を使用。左縦軸が月降水量 (mm)、右縦軸が月平均気温、横軸が月。都市名に付随しているのは気象観測所の標高 (m) と年降水量。
出典：クルグズ共和国中央水文気象局の観測データより

(図4)。特にナルン州はクルグズ人の割合が97.1%と州全体の中で最も高い。チュイ州は州全体の中で、ロシア人の割合が47.8%と、最も高い。南部の州は、オシュ州でウズベク人が31.8%、バトケン州でタジク人が7.1%となっており、ウズベク人、タジク人の割合が北部と比較すると高いが、ロシア人の割合は低い。次に、1998年と1999年の民族構成を比較すると、いずれの州でもロシア人の割合が減少している。国全体に占めるロシア人の比率は1989年の21.5%から1999年の12.5%へと減少した。一方、クルグズ人の数は国全体で52.4%から64.9%へと増加している。特にナルン州はクルグズ人の割合が更に増して98.7%となっている。南部の州では1989年と同様

にウズベク人、タジク人の割合が北部の州と比較して多いものの、割合は1989年から大きな変動は見られない。

クルグズスタンでは、ロシアの南下政策により、北部からロシア人による入植、産業化が進み、歴史的背景が南部とは異なる。そして、北部ではカザフ人、南部ではウズベク人とタジク人の割合が、州内の比較で見ると顕著である。州の民族構成は接している周囲の国の民族を多く含む。一方で、ソ連崩壊後、首都ビシケク市のあるチュイ州やウスック湖などの観光地として盛んなウスックグル州のような経済状況の良い地域にはロシア人の割合が高いという特徴を備えている。また、中国に接しているナルン州は個人間の直接的な中国との往来はほとん



写真1 標高約2,600mの夏季放牧地（ウスツクグル州）
2006年7月撮影



写真2 村の背後には約4,000mのアトバシ山脈（ナルン州）
2006年7月撮影

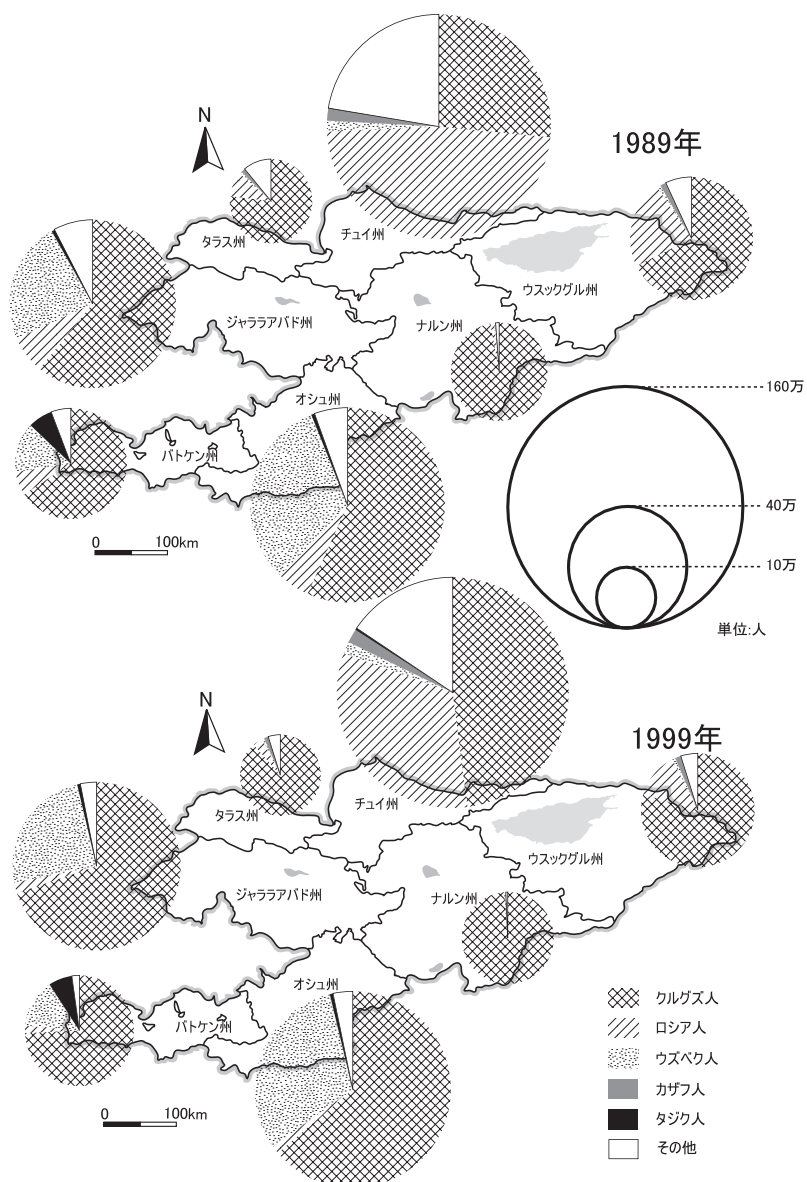


図4 州の民族構成の推移（1989・1999年）

出典：National statistical committee of the Kyrgyz Republic (2000)

どなく、内陸部に位置することから、クルグズ人の割合が突出している（写真3・4）。

IV. 農牧業の地域的特性

1. 農 業

クルグズ人は元来、農業を積極的に取り入れた牧畜をしていたとされ、遊牧民としての気質はありながらも生業としては複合的な性格の強い牧畜であったとされている（澤田1999）。現在、一般的に見られる村家屋に付随した家庭菜園の区画や土地の利用はソ連時代に整った形であり、旧ソ連圏では共通の光景である（写真5・6）。

州別の栽培作物をみると（図5）、州の特徴は、北部・南部ともに小麦が主要な作物だといえる。耕地面積の最大は20万 ha を超えるチュイ州、次いで10万 ha を超えるウスックグル州、5万 ha を超すのはオシュ州とジャララアバド州、他は5万 ha に満たず、バトケン州は耕地面積が最も少ない。

栽培作物の特徴としては、北部のタラス州とチュイ州ではテンサイの栽培があり、ナルン州とウスックグル州ではトウモロコシの栽培はほとんどみられない。この2州は比較的標高の高い土地のため、高地に適した小麦、大麦、ジャガイモの3品目の栽培となっており、他州と比較すると品目が少ない。一方、南部のジャララアバド州、オシュ州では、ソ連時代の名残である広大な盆地による綿花栽培のため、綿花の栽培面積が小麦に次いで多い。品目の特徴は主に自然的要因が強いが、チュイ州のテンサイのように、ソ連時代に建設された砂糖精製工場や、ウズベク人の割合の多い南部の州の綿花栽培といった歴史的背景が現在の特徴に見てとれる。

2. 牧 畜

現在のクルグズスタンで放牧の対象となる家畜は、羊、山羊、牛、ヤク、馬である。まず、国全体の頭数の傾向を見ると、1997年から2006年の約10年で、羊・山羊の頭数は350万から400万、馬の頭数は35万前後の増減を繰り返



写真3 伝統的なクルグズ人の帽子であるカルパックを被るクルグズ人男性とその妻（ウスックグル州）
2006年8月撮影



写真5 家屋に付随して家庭菜園が並ぶ村の風景（ナルン州）
2007年8月撮影



写真4 州最南部の中国国境付近の放牧キャンプ地（ナルン州）
2007年9月撮影



写真6 標高約2,400mの村のジャガイモ畑（ナルン州）
2007年8月撮影

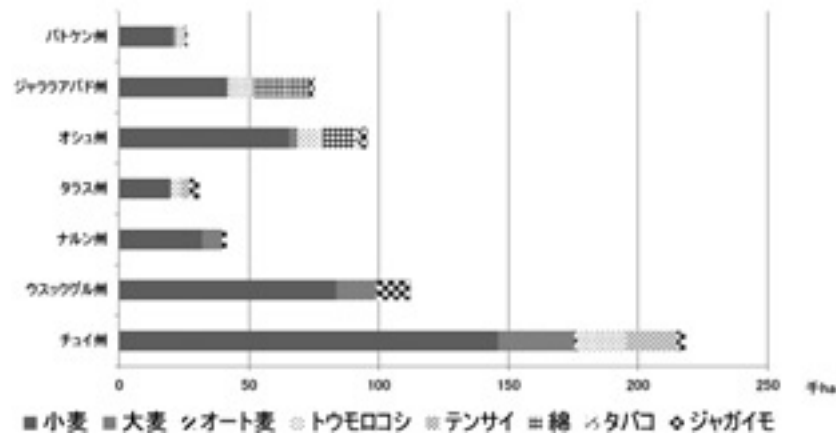


図5 州の栽培作物別耕地面積

データは2002年。出典：National statistical committee of the Kyrgyz Republic (2003)

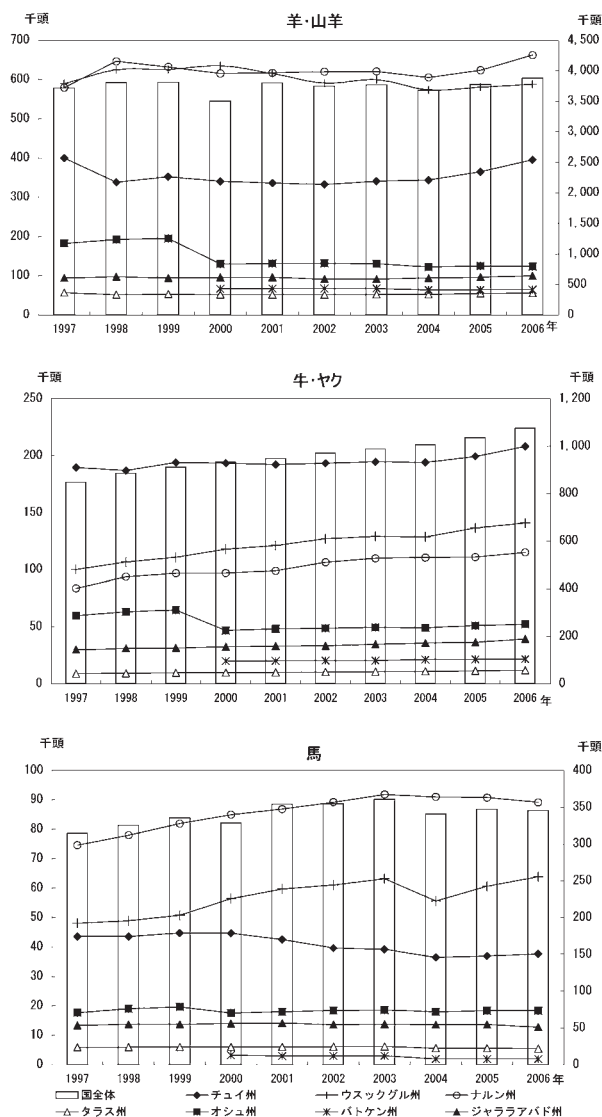


図6 クルグズスタンの家畜頭数の推移

左軸は州、右軸は共和国全体の頭数。バトケン州は1999年にオシュ州から分かれてできた州であるために2000年以降のデータとなっている。

出典：クルグズ共和国国立統計委員会家畜統計データより

返しているのに対し、牛・ヤクは約20万頭の増加している（図6）。一方、州の家畜頭数を順に見ると、羊・山羊の頭数が50万を超えているのがナルン州、ウスックグル州、次いで40万頭前後のチュイ州であり、その他の州は20万頭に満たない。ナルン州、ウスックグル州、チュイ州の羊・山羊の頭数は、その他の州に比べ比較的增加傾向にある。牛・ヤクの頭数はチュイ州の20万頭で最も多く、10万頭前後で増加傾向にあるのはウスックグル州とナルン州、その他の州は5万頭以下で横ばい傾向である。馬の頭数は羊・山羊と同様に、ナルン州で最も多く、次いでウスックグル州、チュイ州であり、その他の州は2万頭以下で横ばい傾向である。

次に、州別の第1次産業に従事する労働人口（1999年）を使用し、2005年の家畜頭数をもとに家畜密度を算出した（図7）。その結果、羊・山羊は7段階に分けられ、最高値の7がナルン州、5がウスックグル州、3がオシュ州とタラス州、2がジャラルアバド州とバトケン州、最低値1はチュイ州である。そして、牛・ヤクでは7段階の最高値7がチュイ州、次いで4がナルン州、ウスックグル州、オシュ州、3がジャラルアバド州、2がバトケン州、最低値の1がタラス州となっている。最後に、馬は6段階に分けられ、最高値の6はナルン州、3がウスックグル州、2がチュイ州、オシュ州、ジャラルアバド州、最低値の1はタラス州とバトケン州となっている。家畜密度の結果をまとめると、ナルン州とウスックグル州が総じて高く、牛においてはチュイ州が突出している。州面積の狭いタラス州とバトケン州の家畜密度は低い。基本的に北部の家畜密度が高く、南部は全体的に低い。

以上の結果から、羊・山羊と馬の家畜密度において、基幹民族であるクルグズ人の割合が高く、放牧に適した

広大な土地をもつナルン州の牧畜が最も盛んだといえる（写真7）。6～9月の夏を中心に高地へと垂直移動をし、家畜の放牧に従事するのはクルグズ人のみであり、ナルン州に次ぐ山岳地域をもつウスツクグル州も牧畜が盛んだといえる（写真8）そして、牛・ヤクに関して、チュイ州は平野部でのロシア人による牛の飼育が盛んで、ナルン州、ウスツクグル州では高地でのヤクの放牧が行われている。（写真9・10）。牛の頭数の増加は都心部での乳製品の需要にともなう要因が大きいといえる。

VI. まとめ

本稿では以下の4点の地域的特性が明らかになった。

- ① 高地の広がるクルグズスタンのほぼ東部に位置す

るナルン州、ウスツクグル州では、標高の上昇にともない、降水量が上昇し、夏に雨季となり、冷涼な気候環境となる。そのため、夏の家畜の放牧に適しているといえる。そして、北部のビシケク市は標高が1,000 mに満たないにも拘らず、気温、降水量ともに他市よりも比較的高い傾向にある。また、南部では北部に比べ、低地が多いために気温が高く降水量が少ない傾向がある。

② 1989年と1999年を比較した結果、各州において、クルグズ人の割合は増加し、ロシア人の割合は全体的に減少した。また、隣国と接する州では、その国の民族割合が高い特徴があり、南部ではウズベク人とタジク人の割合が高く、北部ではカザフ人の割合が高い。これらの特徴はソ連時代に引かれた国境の影響である。

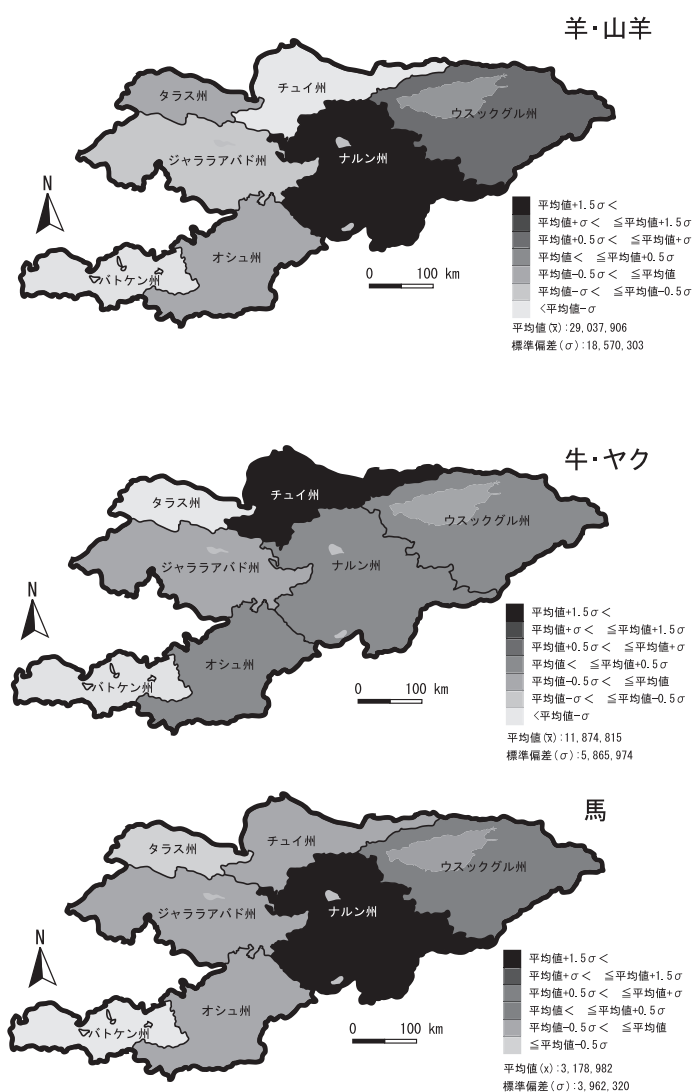


図7 州における家畜種別の家畜密度

家畜密度の計算式は、家畜密度＝家畜変換率×家畜頭数×100/農業従事者数（山本・手塚、1977）、家畜変換率は Woytinsky (1953) による。使用した人口データは1999年、家畜データは2002年。

出所：National statistical committee of the Kyrgyz Republic (2000)、クルグズ共和国国立統計委員会家畜統計データより

一方で、首都の置かれたチュイ州と観光に適したウスツクグル州は市場経済の影響が大きいため、現在でもロシア人の割合が高い。一方で、最もクルグズ人の割合の高いナルン州は高地で農業に適さない土地のため、家畜の放牧が盛んである。

③ 国全体では小麦を主に栽培している。チュイ州ではソ連時代に建設された砂糖の精製工場の立地によるテンサイの栽培、ナルン州、ウスツクグル州は農業に適さない高地であるため、家畜飼料となる大麦を栽培している。南部では綿花とトウモロコシが栽培されており、オシュ州ではタバコの栽培がみられるなど、北部に比べて栽培品目が多い。

④ 家畜頭数の推移、家畜密度によると、ナルン州とウスツクグル州で、羊・山羊と馬の放牧が盛んだといえる。一方、牛は都市部で乳製品の需要により、チュイ州で顕著に多い。

以上のように、今回はマクロな視点から地域的特性を

考察した。今後は、州レベル以下の単位での具体的事例をもとに、その地域の性格を明らかにしたい。

謝 辞

本稿は、平成19年度総合地球環境科学研究所、資源領域プログラム、国家の交錯と生業変化を軸とした環境史の解明、中央ユーラシア半乾燥域の変遷（研究代表：窪田順平）による成果の一部であり、2008年3月の中央アジア学会、6月の立正地理学会で発表したものを骨子に作成した。

そして、本稿の作成にあたり立正大学の長坂政信教授をはじめ、立正大学の先生方にご指導して頂いた。また、東洋大学の小俣利男教授、四国学院大学の吉田世津子准教授、地域活性化プランナーの寺田明司氏には貴重なコメントを頂いた。さらに、総合環境研究所研究員である奈良間千之氏には研究を始めるにあたって数々の助言を頂いた。以上の方々全てに、お礼を申し上げる。



写真7 標高約3,000mの放牧地で放牧中の羊たち（ナルン州） 2007年7月撮影



写真9 ロシア人によるホルスタイン牛の飼育（チュイ州） 2004年8月撮影



写真8 標高約2,600mの馬の放牧風景（ウスツクグル州） 2004年6月撮影



写真10 州最南部の中国国境付近で飼育されているヤク（ウスツクグル州） 2006年9月撮影

注

- 1) 日本では従来、日本語表記として、「キルギス」や「キルギスタン」といったカタカナ表記が用いられてきた。しかし、本稿では近年の研究者間で使用されている、現地の発音と慣例に則した表記を用いた。国の正式名称を「クルグズ共和国」、その略称を「クルグズスタン」を用い、人を示すときは「クルグズ人」とした。
- 2) ソ連時代、村は村ソヴィエト (*sel'sovet*) と呼ばれた政治・行政機関の管轄下にあったが、ソ連崩壊後はこの管轄の村を統治するため、新たに村政府 (*ayıl ökmöt*) という末端行政単位が置かれた。村政府の長は所属の村の人々による選挙で選び、税金 (家畜や土地) 徴収、自然保護、灌漑設備の維持といった役所仕事及び、人々の生活全般の相談窓口の役割を担っている。
- 3) 総人口のみは CIA の website を参照したが、他の州ごとの人口統計は1999年の統計データを用いた。
- 4) チュイ州とビシケク市は、統計上で別区分となっているが、本稿ではチュイ州とビシケク市を合計した数値をチュイ州とした。
- 5) ソ連時代はフルンゼと呼ばれ、ソ連崩壊後にビシケクと名称変更となった。

文 献

- 池谷和信 (2006): 『現代の牧畜民—乾燥地域の暮らし』。古今書院。
- 及川俊信 (2004): 定住と越冬—ソビエト連邦期におけるカザフスタンの家畜飼育の事例から。千葉大学ユーラシア言語文化論集, 7, 13—23。
- 国際協力機構農林水産開発調査部 (2003): 『キルギス共和国営農改善及び農畜産物加工業振興計画調査予備・事前調査報告書』。国際協力機構。
- 澤田稔 (1999): ワリハーノフのキルギズ研究。国立民族博物館研究報告別冊, 20, 379—407。
- 月原敏博 (2000): 移動牧畜の類型と遷移に関する考察。人文研究, 52(8), 47—71。
- 吉田世津子 (2004): 『中央アジア農村の親族ネットワーク—クルグズスタン・経済移行の人類学的研究—』。風響社。
- Alimaev, I. I. (2004): Transhumant Ecosystems: Fluctuations in Seasonal Pasture Productivity. In Kerven, C. (ed.); *Prospects for Pastoralism in Kazakstan and*

- Turkmenistan: From state farms to private flocks*, Routledge Curzon, 31-51.
- FAO (2001): *FAO Animal Production and Health Paper 150*, Pastoralism in the new millenium. FAO, Rome.
- Kerven, C. (2004): Agrarian Reform and Privatization in the Wider Asian Region: Comparison with Central Asia. In Kerven, C. (ed.); *Prospects for Pastoralism in Kazakstan and Turkmenistan: From state farms to private flocks*, Routledge Curzon, 10-26.
- National statistical committee of the Kyrgyz Republic (2000): *Publication plan of subjects Results of the First National Population Census of the Kyrgyz Republic of 1999*, Bishkek.
- National statistical committee of the Kyrgyz Republic (2003): *Results of the First Agricultural Census of the Kyrgyz Republic of 2002 (The First Phase), Publication 1. Arable Land Area and Its Use*. Bishkek.
- Peter, S. (2001): The Scientific World and the Farmer's Reality: Agricultural Research and Extension in Kyrgyzstan. *Mountain Research Development*, 21-2, 109-112.
- Sarah, R. and Milner-Gulland, E. J. (2004): Contraction in Livestock Mobility resulting from State Farm Reorganization. In Kerven, C. (ed.); *Prospects for Pastoralism in Kazakstan and Turkmenistan: From state farms to private flocks*, Routledge Curzon, 128-145.
- Schuler, M., Dessementet, P., Torgashova, L., Abubakirova, T., Minbaev, M. (2004): *Mountain Atlas of Kyrgyzstan*. NSC Bishkek-EPF Lausanne, Kyrgyz-Swiss Statistical Cooperation.
- The World Factbook. The Central Intelligence Agency (CIA), [https://www.cia.gov/cia/publications/factbook/index.html] (最終閲覧2009年2月27日)
- Wilson, R. T. (1997): Livestock, Pastures, and the Environment in the Kyrgyz Republic, Central Asia. *Mountain Research and Development*, 17-1, 57-68.
- Woytinsky, W. S. and E. S. (1953): World population and production: trends and outlook. New York, Twentieth Century Fund.

The Regional Characteristics of Agriculture and Livestock Farming in Kyrgyz Republic

KAJIURA Takeshi*

*Graduate Student of Geo-environmental Science, Rissho University

Keywords: Agriculture and Livestock Farming, Livestock Animal Density, Regional Characteristics, Kyrgyz Republic